

高松凌雲の研究

— 医師としての思想形成 —

日本福祉大学 氏名 山田 みどり (会員番号 7872)

キーワード：思想形成，儒教，キリスト教

1. 研究目的

明治初期の日本は近代国家形成のために、西洋医学の移植に重点がおかれ、救療制度が不十分であった時代に、高松凌雲（以下凌雲）は、取り残されていった底辺の人たちに開業医を中心に組織的に医療を施すシステムである同愛社を1879(明治12)年に作りあげた。

本報告の目的は、三人の日本人医師と米国医療宣教師の思想が凌雲の医療活動に与えた影響を考察することにある。それゆえ、春日寛平、緒方洪庵、石川桜所の思想・人格について明らかにすることと、ヘボンの英語塾がどのようなものであり、宣教師達の人格・思想が、英語を通して凌雲の思想形成にどのように影響を与えたかを検証することである。

2. 研究の視点および方法

緒方洪庵（以下洪庵）やヘボンについては、十分研究がなされており先行研究も多く見られる。洪庵に関する代表的な先行研究としては、洪庵を蘭学者、医学者、教育者としての生涯を描いたもの、ヘボン、ブラウン等の先行研究は、宣教師としての役割と英語塾、施療に関する研究、ブラウンに関しては、幕末・明治初期の政治や社会の動向、英語教育、神学校の創設に関する書簡集がある。一方、春日寛平（以下寛平または載陽）については、載陽の経歴や人となり、また広瀬旭荘との関係を述べたもの、石川桜所（以下桜所）の先行研究は、郷土史のなかで桜所の生涯にわたる関係書簡集を中心に研究がなされている。

研究方法は、凌雲の思想形成を大きく4期に区分し、歴史研究を用いた。本報告では、第2期の青年期後期の医師としての食客時代から適塾遊学と英語塾時代を扱い、凌雲の師の思想と人格を通して、凌雲の思想形成に及ぼした影響を検討する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守する。

4. 研究結果

春日寛平とは「嘉永（1848）以来名医を挙げる時はまず指を載陽に屈した」と言われる漢方医であった。寛平は詩文や禅学に秀でており、当時の名士・高僧等と交流を持ち、人となりは寛厚、至誠を以て人に接した。寛平の医療の基本は「薬は実に霊あり、然れども患者吾を信ぜざれば、薬或は其の霊を失せん、之を以て其の病を治せんと欲せば、宜しく先ず病者をして吾を信ぜしむべし」であった。

凌雲は、1859（安政6）年石川桜所に入門する。桜所は地方開業医の子として生まれ、

法印の位にまで上り詰めた人物である。桜所は山内容堂、松平春嶽と親しかったが、最も知遇を得たのは慶喜であり、慶喜は桜所の悲報を聞くや「惜しむべき好男子失ふ」と嘆いた。詩友には大沼枕山、小野湖山がいるが、桜所の性格は森厳で「櫻所が軍醫部に出勤するときは『松本總監を始め出勤者一同襟を正』した」との記述がある。

凌雲は桜所の許しを得て、緒方洪庵の適塾に遊学している。洪庵について、諭吉は「先生の平生、温厚篤実、客に接するにも門生を率いるにも諄々として応対倦まず、誠に類い稀れなる高德の君子なり」と述べており、洪庵は師弟の関係について「師弟の拘りは生涯除くべからず、大切な事と存じ候」と言い、塾生が適塾を去るときは、和歌と医療倫理を説いた12条の『扶氏医戒之略』を送っている。また、学者としての洪庵は「道のため」に多くの医学書を翻訳した。

凌雲は1864（元治元）年11月から1865（慶応元）年5月まで「教師へボンバラトムソン等數氏の教を受く」と述べ、その1865（慶応元）年の英語学校は、25人でクラスが構成されていた。ヘボンは、英語クラスで『日英会話編』を使用し「その教科書から沢山の聖書の真理を拾いあげ」とのヘボンの記録が残されている。S R ブラウンは「英文法の原理を理解するのに、聖書からの引用文を使用することは容易」で「黒板に書いて示します」とベルツに書き送っている。ヘボンの人柄は、ヘボン博士が話題に上った時は君子と呼び「博士の人格がいかに尊敬を集めていたか証明して余りある」と林董は書き残している。

5. 考察

医師の知識・技術を担保し得ない江戸時代の医師社会では、師弟関係を示すことが医師としての知識と技術を示す一番簡単な方法であった。そしてその知識・技術の経験を積む最大のチャンスが遊学である。凌雲は漢方医春日寛平、蘭学医緒方洪庵、石川桜所に学んだが、彼らは共に儒学を学び、漢詩や和歌に優れていた。また彼らは医師の技術や知識のみならず教育者として凌雲に思想的影響を与えた。同愛社の貧困者の治療は「猶富貴ノ病客ヲ視ル如ク」とされ、それは洪庵の『扶氏医戒之略』の医の倫理である。また「良醫トイエドモ患者之ヲ信セサレシハ其藥効ヲ収ムル能ハザル者ニ候」は寛平の医師としての心構えである。凌雲は日本の近代化に英語は必要と英語学校に通いヘボンから英語を習い、ヘボンはブラウンの『日英会話編』を使って授業を行った。その中にはルカによる福音書6章が見られる。『近代日本キリスト教』の中で隅谷は当時の士族達は「キリスト教を儒教的倫理の延長を見、非常に倫理的に理解して」、「儒教の世界で知っていた倫理よりも、もう一段深い倫理的世界がそこにあるというのでキリスト教に移行する」と言及している。凌雲もヘボンやブラウンの思想を理解しその思想を内在化して行ったのではなかだろうか。

本報告は、凌雲の青年後期の思想形成を考察したに過ぎない。今後の課題は、凌雲の幼少期、青年期の間関係や環境を考察し、凌雲の思想をより明らかにすることである。

引用文献

緒方富雄（1963）『緒方洪庵伝』岩波書店。